

Meeting Report

第109回日本泌尿器科学会総会

会期 2021年12月7日(火)～10日(金)

開催地 日本・神奈川

小坂 威雄

慶應義塾大学医学部泌尿器科学教室専任講師

現地開催で



「泌尿器科の世界観

—比類なき専門性と多様性—」

をテーマに開催された第109回総会

当初2021年4月に予定していた第109回日本泌尿器科学会総会は、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い2021年12月7～10日(11日は市民公開講座)へと延期となりました。開催の直前に、WEB開催なのか？ ハイブリット開催なのか？ 現地開催なのか？ 大会長である大家基嗣教授のファイナルアンサーは、現地開催！ 新型コロナウイルス感染症の勢いも下火になったタイミングは、大会長をはじめとする泌尿器科学会員の情熱からか、鎌倉時代の元寇における神風を髣髴とさせるものでした。いざ蓋を開けてみると4,500名以上もの参加者が集い盛況のうちに開催され、無事に大きな事故なく終了となりました。

私は今、充実感と安堵の気持ちと、翌日12月11日に東京国際フォーラムで開催される市民公開講座の準備と、その夜に収録のある日本泌尿器腫瘍学会のWEBセミナーの準備に追われつつ、総会の主会場であるパシフィコ横浜の控室でこのMeeting Reportの筆を取っています。主幹校の一員として皆様をお迎えする立場と、参加者としての視点とを交えて報告させていただきます。

総会のテーマは、「泌尿器科の世界観—比類なき専門性と多様性—」。泌尿器科の特徴は、幅広い疾患を扱い守備範囲が広く、それぞれに比類なき専門性が求められることはいまでもありません。治療では、外科手術、薬物治療、放

射線治療を行い、これまた私が若きし頃に所属した自衛隊に求められる自己完結型、といつてはばかりのない診療科です。対象患者は、小児から高齢の方まで年齢、性別を問わないという多様性を内包しています。こうした泌尿器科の特徴から推察されるのは、泌尿器科医も実に多様な人材が集まっていることです。一方で、生殖医療から癌患者に代表される終末期医療も扱う訳ですので、文化・宗教などあらゆる分野を包括した価値観が泌尿器科医療に反映されうるといっても過言ではありません。これら泌尿器科の特徴である高い専門性と、診断から外科治療と薬物治療を貫徹して行う多様性から育まれた世界観を伝え、新たに創造し、そもそも泌尿器科学とは何か？ を問いかけ、魂を共振させる！ これこそが、大家大会長のお考えでした。

久しぶりに学会場で直にお会いして場を共有した先生方は、マスク越しとはいえ皆笑顔でとても楽しそうに生き生きと見受けられ、存分に共振させられたのではないのでしょうか？ 当の私も、主幹校として皆様をお迎えする立場でありながら参加者として共振させられたのだから……。

泌尿器科学を起点とした世界観の限界を超えるために、医学以外の分野からの特別講演、未来先導講演、そして世界観講演が複数とり入れられ、分野横断的な企画が多数設けられました。特別講演は、細川護熙先生(第79代内閣総理大臣/アーティスト)による「細川家700年 文と武と美」、未来先導講演は池上彰先生による「変わりゆく世界と日本—グローバル社会を生きる—」でした。世界観講演は、森村泰昌先生(現代美術家)、亀山郁夫先生(名古屋外国語大学学長/